リバースデイ

風之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバースデイ

【Nコード】

N4489L

【作者名】

風之

【あらすじ】

自分の誕生日を覚えていないという不良の幼馴染にたいして主人公がとった行動とは・・・。

(前書き)

自分の誕生日を祝ってくれた友人、知人、そして家族に感謝をこめて。

戸棚から消毒液や絆創膏、冷蔵庫からは氷をビニール袋に詰め、ついでにシップも一袋取り出してから舞は自分の部屋へと向かった。扉を開けると、そこには制服を着た、見慣れた奴がどこかふてくされた表情で座っていた。

「はい、さつさと傷が出来てるところ見せなさい」

そう指示すると、目の前の奴はむすつとした表情でこちらをにらんできた。そんな顔ももう見慣れている。うるたえず、逆に睨み返してやったら、一度したうちが聞こえてきた後しぶしぶと腕をまわってきた。

「まったく、本当に喧嘩が好きね。そのたびに傷作ってきて。ドMなの？」

慣れた手つきでそいつの腕に消毒をし、絆創膏を張りながら舞は言う。

「大きなお世話だ。俺が何しようがてめえには関係ないだろうが」

「それ、傷の手当してもらってる相手に言う言葉？」

「頼んだわけじゃねえよ」

バシツ、と舞はそいつの頭をたたいた。

「いつてえ！ 何しやがる？」

「人の好意には感謝する。はい、復唱！」

「何で俺がそんなこと・・・」

「ふ・く・しよ・う」

にらみを利かせていうと、相手は舌打ちしてそっぽを向いてから、ぼそぼそといわれたとおり言葉を繰り返した。

舞が今手当をしているこいつは、同じ高校に通う幼馴染の啓一。

いつからこのような関係になったのか、舞は覚えていない。ただ昔から喧嘩ばかりしている啓一に、傷の手当をするようになったのは物心つく前だった気がする。母親によると、小学校一年生のころ、

自分がいつも傷だらけの啓一を見て手当てをしてあげたいと言いだしたらしい。以来、機会があることにこいつの傷の手当は自分がするようになったとか。つまり、目の前にいる啓一はそのころからすでにやんちゃだったということだ。

そんな関係のまま、いつの間にか自分たちは高校三年生になってしまった。優等生の自分と不良の啓一が同じ高校に入れたのは、ひとえに舞が入学試験当日に熱を出して試験が受けられなかっただけの話なのだが、自分たちの関係はそんな偶然も重なって今も続いていた。

「もうちょっと大人になろうとは思わないの？ 喧嘩ばかりしないで、将来のこと考えるとか、勉強するとか」

さきほどとは反対の腕にシップを張りながら、舞はつぶやく。

「うるせえな。てめえには関係ないだろうが。もうすぐある生徒会選挙の心配でもしてやがれ」

啓一が突き放すように言う。舞は一週間後にある生徒会選挙で生徒会長に立候補しているのだ。

「大きなお世話よ。どうせ会長に立候補してるのは私だけなんだし。それよりあなたの勉強のほう心配だわ」

「まったく、いちいちうるせえな。勉強、勉強つてよ。そんなにあるが楽しいか？」

「楽しいからやるわけじゃないでしょ？ まったく、明後日十八になる奴の言葉とは思えないわね」

腕にシップを張り終えた舞は、今度は適当に見当たる小さな傷に絆創膏を張っていく。おとなしくされるがままになりながらも、啓一は依然として不満そうな口調で話し続けた。

「ハ、本人すら覚えてねえ誕生日を把握してるとか、お前も物好きなやろうだな」

その一言を聞いて、舞は思わず作業の手を止めて啓一の顔を見た。なんだよ、と啓一はぶっきらぼうに聞き返してくる。

「あんた、自分の誕生日覚えてないの？」

ああ、という言葉はそれが当たり前だと疑われないような雰囲気です。舞は信じられない思いで目の前の幼馴染を見つめた。

「馬鹿なの？ 何で覚えてないわけ？ そんなに脳細胞足りてないとは思わなかったわ」

「覚えててなんになるんだよ。年が増えるから何か変わるわけじゃあるまいし。世間じゃ誕生日を祝うなんてやってるがよ、あれの意味もわからん。そんなことする必要ねえだろ」

バシツ、と再び頭を殴る音が部屋に響いた。同じ場所を二度たたかれた啓一は頭を抑えてしばらくうなる。

「あんた、こんなに馬鹿だとは思わなかった。あんたが生まれた日よ？ その日、その瞬間に、あんたは生まれたの。その日がなかったら、あんたは今この世にいないの。そういうめでたい日だから、みんなでお祝いするんじゃない」

「いてえな。傷に響くだろうが！」

「あんたが馬鹿なこと言うからでしょ！ ほら、これでも当てておきなさい」

そういつて舞いは氷袋を啓一に渡す。啓一はひったくるようにそれを受け取ると殴られた箇所へ急いで当てた。

「知るかよ、誕生日なんて。むしろその日がなきゃよかったんだ」
「はあ？ と舞は喧嘩を売るように聞き返す。しかし、啓一はまったく意に介さず続けた。

「だってそうだろうがよ。こんな喧嘩ばかりしてるろくでもねえ俺だぞ？ さっきからお前が罵倒し続けてるだろうが。そうやって罵倒されるような、糞みたいな俺が生まれてきたほうがよかったって？」

吐き出される言葉に、舞は何も言えなくなってしまう。

「くだらねえ。誕生日とか誰が祝うかよ」

そうはき捨てて、啓一は立ち上がった。圧倒されていた舞は、そこでやっとわれに振り返り啓一を止めようとす。

「ちよっと、どこ行くのよ」

「帰るんだよ。傷の手当はもう終わっただろうが」

そういつて啓一は乱暴な足音を立てて部屋を出て行った。いつもは玄關まで見送るの舞だが、今日はその背中を追いかけることができなかった。

部屋から立ち去るときの啓一の背中が、どこかさびしそだったからだ。

午後七時。啓一が帰り、夕食を終えた自室で、舞は机に向かい教科書を開きながらも、頭では勉強とはまったく関係のないことを考えていた。

喧嘩ばかりし、ろくに勉強もせず、世間からは不良扱いされている啓一。学校ではよく問題を起こす生徒として扱われているし、近所からの評判もよくない。それは家が近くの舞いもよく知っていたし、本人も自覚していることだろう。

おそらく、啓一自身も自分がこのままではだめだということを感じているのだろう。先ほどの会話でも、思い返してみると言葉の端々にそのような雰囲気が含まれている気がする。喧嘩ばかりしていかにも喧嘩好きに見えるが、実はそうでないことを舞は知っていた。啓一は決して自分から喧嘩をしにいくような奴ではない。自分や、あるいは友人が馬鹿にされているのを聞いて、すぐにカツとなってしまう手が出てしまうのだ。そんな状態が昔から続いているものだから、近所の不良からも目をつけられよく喧嘩を吹っかけられる。それをうまく受け流せない上に、中途半端に強いものだから、余計に敵が増え、喧嘩をする数が増える。完全な悪循環が出来上がってしまったのだ。

そのことを全部知っているから、舞は啓一の手当てをいつもするのだ。今日だって帰り道を歩いていたら、ぼろぼろになった啓一を見つけたから啓一を家に上げたのだ。あの傷がもし、自分から喧嘩

を吹っかけてできた傷ならば、舞も手当てなどしない。そんなもの自業自得だし、それが本人にとっていい薬になると思うからだ。

（うつん。本当はそうじゃない）

心の奥底で、そんな声がした。

舞が啓一の傷の手当をするのは、それだけが理由じゃない。もし啓一が本当に自分から喧嘩を吹っかけて傷を作ってきたとしても、自分はおそらく手当をするだろう。なんだかんだと文句をいい、説教をたれながらも、手当てをすることはやめはしないのだ。

（その理由は、自分が一番よく知ってる）

それでも、舞は啓一に自分の気持ちを伝えられないでいた。もし伝えて受け止めてもらえなかったら、今の関係が崩れてしまうから。自分が説教をしながら傷の手当をし、啓一も文句を言いながらおとなしく手当てをされる。帰り道で出会えば一緒に帰ったりもするし、学校でもおしゃべりするくらいのは結構ある。そんな今の関係を、舞は手放したくはなかった。

しかし、今の状態が永久に続かないことも知っていた。

自分たちはもう高校三年生だ。啓一は明後日十八になり、その二カ月後には自分も十八になる。やがて二人の進路が決まっていき、三月になれば卒業。家が近いといっても会うことはほとんどなくなってしまうだろう。もし自分が啓一のどちらかが進路の関係で県外に引っ越した場合はそれこそもう会うことはないかもしれない。

そんなことを考えると、たまらなく胸が苦しくなる。しかし、今の自分の気持ちを相手に伝えてこの関係が壊れてしまったらと考えると、それもいやだと思えてくる。結局は、勇気がもてないただの臆病者なのだ。

（結局、私も子供なんだろうか）

好きな相手に告白できないような臆病者の自分は、啓一に説教できるほど大人ではないのか。いや、そもそも大人と子供を分ける基準とは何なのだろうか。考えれば考えるほどわけがわからなくなり、それがまったく意味のない考えに移っていきそうになる。

「私、どうしたらいいのかな」

視線を落として呟いてみるが、目の前の教科書のどこにもその答えは載っていないかった。

二日後の放課後、舞は校門で啓一を待っていた。

昨日、結局啓一とは話さずじまいで今日を迎えた。学校が一緒にモクラスが違うため、そんなに話す時間が作れるわけではないし、不良の啓一は始業時間ぎりぎりに学校に登校し、舞は余裕を持って学校に登校する。下校時刻は選挙活動で忙しい舞は遅くまで学校に残っていたし、授業が終わるなり啓一はさっさと帰ってしまう。一昨日話すことができたのは、考えてみれば結構久しぶりのことだった。

気分はまだすっきりしないまま。どうやって啓一と言葉を交わせばいいかはつきりとは決まっていない。それでも、毎年渡している誕生日プレゼントをこんなことでやめてしまうのはなんだか嫌だったので、昨日の夜のうちに放課後、校門で待つようにメールを入れておいた。そっけなくではあるが、「わかった」と返信が来たので一応来る意思はあるようだ。

(それにしても遅いわね)

舞は腕時計を見て考える。授業が終わってからもうだいぶ時間がたっている。部活動のない多くの生徒が校門を通り過ぎ下校していた。舞が教室を出るとき、啓一がいる隣のクラスはまだ帰りのホームルームをしていたので先に帰ったということはないはずだ。

(宿題でもサボって補習でも受けてるのかしら)

そう適当に見当をつけた時、こちらに向かって二人の女の子が走ってくるのが見えた。

「恵子、結衣。どうしたの？」

それはクラスメートの恵子と結衣だった。二人とは一年生のころ

からクラスが一緒に、二年生の時には啓一と自分と同じクラスになったこともある。今ではクラスの中ですべて仲の良い友達だった。

「なによ、そんなに焦って。なにかあった・・・」

「舞！ また啓一君が喧嘩して、今職員室に！」

舞の言葉をさえぎって、恵子があわててそう言った。どうやらこの二人は自分が今日ここで啓一を待っていることをどこかで知り、わざわざそのことを知らせに来てくれたらしい。

「そうなの？ わかったわ。ならもうちょっとここで待ってるわ。わざわざ知らせに来てくれてありがとうね」

それくらいのことにはもう慣れてる。今までも何度か喧嘩がばれて職員室に啓一が呼び出されたことはあった。停学にならないかが気がかりだが、そこはもうあわててもしょうがない。とにかく二人を落ち着かせるために舞は冷静にそうお礼を述べたのだが。

「違うの！ 啓一君、舞のために喧嘩して職員室に連れてかれちゃったのよ！ 舞の下駄箱にいたずらした男子をたまたま啓一君が見つけて、それで啓一君が怒って・・・」

舞の心臓がいきなりとび跳ねた。今にも走りだしそうな体はなぜか固まったまま動かない。耳だけが敏感になり、事の顛末を話す恵子と結衣の言葉が次々と頭の中に入って行った。

二人の話によると、生徒会長に立候補したことで目立ち始めた舞の下駄箱の中に、誹謗中傷を書いた紙を二人の二年生男子が入れていたらしい。時刻としては放課後すぐのことで、帰る生徒も何人かいたらしいが、男子生徒二人は構わずいたずら書きの紙を堂々と舞の下駄箱に入れていたということだ。ちょうど帰りがけに恵子と結衣はそれを見て、すぐさまそれを止めに入ろうとしたのだが、その二人よりも先に飛び出した人物がいたらしい。それが啓一だったという。今まで見たこともないようなものすごい形相で二人の男子生徒に殴りかかり、たちまち喧嘩になったそう。恵子と結衣はすぐさま止めようとしたが、怒った啓一を止めることはできなかったらしい。数分後騒ぎを聞きつけた教師がやってきて、啓一と男子生徒

二人を職員室に連れて行ったということだった。

「ごめんね、舞。ごめんね」

語り終えた恵子と結衣は泣きながら謝った。そんな二人を見てようやく頭の中が冷えてきた舞は二人にお礼をいい、後は自分が何とかすると言いついてから一人で職員室に向かった。

足は、無意識のうちにつけ足になっていた。

靴を履き替えるためによった下駄箱には、男子生徒生徒が入れたであろういたずら書きが二、三枚残っていた。おそらく、喧嘩のどさくさで回収できなかったものである。そこに書かれてある内容を見て、舞は嫌悪感よりもばかばかしいとさえ思えてくる。書かれていることは幼稚だし、行動自体が子どもとしか考えられない。しかし、そんなばかばかしい行動に本気で怒ってくれた味方が、いま叱責を受けているのだ。舞はいたずら書きをぐしゃぐしゃに丸めて近くにあったゴミ箱に投げ捨て、廊下を走った。

職員室の前にたどりつくと、ちょうど扉が開き、中から目的の人物が出てきた。

「あ……」

舞はその姿を見てなんと声をかけていいか言葉に詰まる。一方相手も、自分がここにいるとは全く予想できていなかったようであり、こちらを見て固まった。

ずいぶん長い間そうしていたと思える一瞬の後、先に動いたのは啓一のほうだった。こちらのことを完全に無視して、舞の横を通り過ぎようとする。それを見て、ようやく舞の中の時間も動きを取り戻した。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！」

自分の横を通り過ぎ、すれ違う寸前の相手に声をかける。その言葉は無視して、相手はなおも歩いていく。

「待ちなさいってば！」

今度は大きく叫んで、その袖をつかんだ。無理やり引きとめられた相手は舌打ちしてから立ち止まるが、こちらを一向に見ようとはしなかった。

「…今回は見逃してやるが、次は退学の可能性もあるだよ」

その言葉に、舞は心の中で安堵のため息を漏らす。すぐに不安が押し寄せてくる。退学という言葉が、深く自分の心をえぐった。

そんな舞のことなどお構いなしに、啓一は舞の手を振りほどき再び歩き始める。条件反射的に舞は手を伸ばしたが、その手はやはり強引に跳ね返されてしまった。

こちらを振り返ることなく、歩いていく啓一。その背中は、二日前に自分の家をあとにした時のものと全く一緒だった。

人のために怒れる優しさを、暴力という形でしか表わせれないひどく不器用な幼馴染。その優しさは周りに誤解され、いつしか不良という烙印を押され、拳句の果てに、自分ですらその優しさを認めることができなくなってしまった少年。自分の生きる意味を、生まれてきた意味を理解できず、一人苦しむその背中はどんどん遠ざかっていく。

何か考えがまとまらなかったわけではない。頭の中では依然感情がごちゃごちゃになっていて、自分が何を思い、どうしたいのかわからない状態で、それでも体が勝手に動き、気づいたら啓一の肩を掴みこちらを振り向かせていた。

「っ！ おい、なにす…」

相手が叫ぶのもお構いなしにその胸倉をつかみ、顔を近づけてこっぴつた。

「あんた、私の彼氏になりなさい！」

自分が一体何を言ったのか、自分でもよくわからなかった。おそらく、言われた啓一もそうだったのだろう。胸倉をつかんだ腕越しに、体がこわばるのを感じたが、舞の口はそれを無視して言葉を吐き続けた。

「あんたおとこと言ったわよね？ 生まれてきた意味がわからない。

喧嘩ばかりしてる自分なんか生まれてこなければよかったんじゃないかって！」

自分で叫ぶたび、それは自分のことではないのに胸が張り裂けそうになる。こんなにもやさしい彼が生まれてきても意味がないなど、どうして言えるのか？ 彼が、どうしてそう思うようになってしまったのか？

「だったら、私が今日からあなたの生きる意味になる！ あなたは今日から私のために生きなさい。ずっと私のそばにいて、一緒にいて、私を守りなさい！ そのために、あなたは生まれてきたの！」
それはとても無理やりな意味の押し付けだった。しかし同時に、自分の本心でもあった。だから舞は、大声で叫ぶ。叫び続ける。

「あなたは私のために怒ってくれたんじゃない！ 自分のことも顧みず、思いつき怒ってくれたんじゃない！ これからも、私のために怒ってよ！ 私の見方でいてよ！ 私も、あなたの見方でいてよ！ 周りがどれだけあなたを非難しても、責めても、私だけであんたの見方でいるから！」

声がにじむ。視界がゆがむ。目の前にあるはずの啓一の顔が不鮮明になるが、それでも舞はその目を見続ける。目からあふれ出すものをぬぐうこともせず、自分のすべてを相手にぶつける。

「だから、生まれてこなければよかっただなんて言わないで！」

その言葉で、最後だった。

後の気持ちは涙となつてあふれ、口からは嗚咽しか漏れなかった。胸倉をつかんでいた手が緩み、相手の胸に顔をうずめるようにして泣くことしかできなかった。

しばらくの間、自分の泣く声だけがその場に流れた。

廊下は先ほどの自分の叫び声を反射しているようで、何も聞こえないよう変な響きがその場に反響し続けているような錯覚を受けた。それが自分の耳鳴りなのか、本当に反響している音の残滓かもわからない時間だけが、ゆっくりと流れた。

その音がやんだ気がしたのは、自分の背中に手が回された時だった。

た。

「もう、泣くな」

ひどくぶっくらぼうで、しかしとても優しい声。背中におかれた右手からは、とても温かな温度が感じられる。

「お前の言いたいことは、よくわかった。もう、あんなことは言わねえ。だから、顔上げろ」

その言葉で、舞はゆっくりと顔をあげた。よくその顔が見えるように、涙を両手でぬぐう。

あげた視線の先には、いつものぶっくらぼうな、しかしやさしい顔があった。

時刻は午後六時。群青色の空の下を二つの影が並んで歩いていく。

「はい、これ。誕生日プレゼント」

そう言って舞は鞆の中から用意していたものを取り出す。

「プレゼント？」

「そうよ。いつもあげてるでしょ。今回はもうすぐ卒業ということを考えて大人っぽいものにしたの。開けてもいいわよ」

不思議そうに聞き返してきた相手に、舞は笑顔で答える。啓一は少し包みを矯めつ眇めつしてから、包装を丁寧にはどいて中身を取り出す。それは、男性用の腕時計だった。

「これ、高いんじゃないのか？」

「いいのよ。私お小遣いは多めに貰ってるけどあんまり使わないから」

啓一はそれでもどこか遠慮しているようで、舞と腕時計を交互に見比べている。そんな様子がどこかかわいくて、舞は思わず笑ってしまった。

「な、なんだよ。なにがおおかしってんだ？」

「別に。誕生日プレゼントでこんな戸惑うとは思わなかったわ」

「そりゃ、お前、プレゼントにこんな腕時計ももらっちゃったら…」

「腕時計も？」

引っかかりを覚えて、舞は聞き返す。そんな自分の態度に、あわててそっぽを向く啓一を見て、舞はすぐさま啓一が何を言わんとしているのかを理解した。

「それじゃ、私の誕生日にはその腕時計と、私の告白に見合う何かを期待しようかしら」

意地悪にそう言ってやると、相手はそっぽを向いたまま何も言っ
てこなかった。そんな相手の様子がおかしくて、またいとおしくて舞はまた笑ってしまう。

星が輝き始めた夜空の下を、二人の影が並んで歩いて行った。

(後書き)

舞：「この小説って、なんかありがちな設定よね」

啓一：「ありがちといえば、ストーリーもだろ」

舞：「なんか作者の書きたいっていう思いだけが先走ってる気がするし」

啓一：「自己満足でしか書けてないってのはどうなんだ？」

作者：「すみませんでした。こんな小説を読んでくださった皆さんに大感謝です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4489/>

リバースデイ

2010年10月8日15時02分発行